



倉本聰コレクション8

モブの田舎

scénario
1972-79

倉本聰

倉本聰コレクション

8

ミフの町

scénario. 倉本聰
1972-79

KURAMOTO SOH COLLECTION 8

幻の町

1983年3月 第2刷

著 者／くらもとそう倉本聰©

発 行／山村光司

発行所／株式会社理論社

東京都新宿区若松町15-6

電話(03)203-5791

振替 東京9-95736

1983 Printed in Japan／0393-91608-8924

加藤文明社印刷／島田製本

倉本聰作品

幻の町
—北海道作品集

幻の町 もくじ

風船のあがる時 7

ばんえい 37

聖夜 73

りんりんと 105

幻の町 131

ひとり
161

ああ！新世界
191

時計
219

スパイスの秋
247

遠い絵本
277

装画・題字 小野州一
装幀 杉浦範茂

風船のあがる時

昭和47年度
日本民間放送連盟賞優秀賞受賞
北海道放送制作
昭和47年1月30日放送

*

標示板（朝・街）

「札幌オリンピックまで、あと五日」

白い画面

画面に文字が——「午前八時」

河西家・居間

黙々と食事している河西^{かさい}五郎と、妻の雪子。

しばらく。

雪子「そんなに心配しなくなつて大丈夫よ」

五郎、黙々と食っている。

雪子「あなた一年間準備したのよ。大丈夫、私が保証します。風船は一万八千個、キッチンときれいにあがります」

五郎、箸を置く。

雪子「お代わり？」

五郎（首ふる）

雪子「だめねえ——気が小さい」

雪子、茶をいれる。いれつつフツと、

雪子「ねえあなた？」

五郎、何かを必死に考え、机に指で計算している。

雪子、茶をいれつつちよつと笑つて、

雪子「明日何の日か覚えてる？」

雪子、夫を見る。

五郎、

——ばんやり雪子を見る。

雪子。

ちよつと笑い、目をそらす。お茶をつぐ。

雪子「忘れてるンでしょう」

五郎。

五郎「風船屋の戸浦さんはさ、ヘリウムつめて六時間もつていったんだ」

雪子。

五郎「まったくその通り信じてたんだよ。ところが昨日念のため実験してみたんだ——いや、もっともこれは水素でテストしたんだけどさ、五個のうち三個が五時間以上にあがらなくなり、五時間半でしぼんだわけさ。ということほだな」

雪子「お茶をどうぞ」

五郎「午前六時からふくらましはじめると、十一時五十七

分三十秒が審判員宣誓で、その後風船をあげるわけだから、最初にふくらました風船はすでに五時間五十七分三十秒たつてゐるわけで——ということは、放した風船が飛ばないということだ

五郎の顔。蒼白。

雪子、テレビをつける。

いきなり流れだす聖火リレーのニュース。

アナウンサーの声「稚内、釧路、函館と、去る二十日三か所をスタートした聖火は、道北、道東、道南の三コースを経過し」

聖火リレー

走る。

アナウンサーの声「本日八時、札幌市内、北海道庁前への到着をめざして今、各最終出発地をスタートいたしました」

画面と音声、突然中断。

河西家・居間

テレビを消した仁王立ちの五郎。

雪子のインサート。

蒼白の五郎、

不意に電話のダイヤルを廻す。

五郎「小田君ッ。あ、奥さん、アノ、小田君は!? ——ア

ア。じゃですね。トイレ出しましたら大至急式典課のほうに来てくれるように。走ってお願いしますといってください!! 大至急走って!!」

電話を切つてそのままヤッケをつかみ表へとび出す。

雪子、あわてて立ちかけるが、思いとどまり坐り直す。腹を立てている雪子。

無言で食事を再開する。

道

凍てついた朝の道を、真剣そのものに猛然と走つて行く河西五郎。

白い画面

画面に文字が——「午前十時」

河西家・居間

電話のベルが鳴っている。

雪子、手を拭きながらとび出してきてとる。

雪子「河西でございます。——京子!!——いつ来たの!!

うん。——うん。——旦那さまと一緒に。優雅でございますねえ。——どこに泊ってるの?——うん会おうもちろん。出てく。——それじゃ一緒にひる食べない?——十一時半にホテルのロビーに行く。——結構ですよ、どうぞご遠慮なく一緒に。——うち?

——それどころじゃないのよ、オリンピックの準備で。——そうよ。——うん、役所から出向で行かされてるのよ。——一年前からよ。——式典課。——オリンピックの開会式でね。パーツと風船があるでしょう。

あれの直接責任者なのよ。——もう大変よ。——気が小さいでしょ。風船なんて触ったこともなかったわけよ。それが一万八千個、同時にパツとあがつてく

れなくちやまずいわけでしょ。国家的責任があるわけよ。

——笑う事ないじゃない。笑い事じゃないのよ。真剣なのよ彼としては」

真駒内小学校校庭

数百人の生徒を前に、寒風吹きすさぶ朝礼台の上で、必死にしゃべっている河西五郎。

五郎「わかりますねッ。審判員代表川村喜代次」——この

ことばが終つたら風船を手から放すんですよ。川村喜代次——覚えましたかッ?——じゃあみんな一度風船をつかんだつもりで、右手を握って上にあげましょう!!

生徒たち五郎の指示通り右手をあげる。

五郎「おじさんについて口に出してやってみましょう!!いいですねッ。川村喜代次ッ。パツ。ハイッ」

生徒たち「川村喜代次。パツ」

五郎「元気がないッ。——世界の人たちが君たちの風船を見てるんですよ。もう一度元気よくッ。川村喜代次ッ。パツ。ハイッ!!」

生徒たち「川村喜代次。パツ」

五郎「よし!!」

それからもう一つ!! 風船を持ってスケートでリンクを廻っている時、中にはころんだりつまずいたりする人もいます!! 人間は誰でも失敗がありますッ。スケートでころぶことは全然恥じゃない。ただッ。ころんでも絶対に風船だけは手から放してはいけませんッ。いいですねッ。風船を放すのは川村喜代次ッ。つ

ていわれた時だけ!! わかりますねッ。昔、木口小平という、ラッパを吹く係の兵隊さんがいました——」

式典課

男A、電話に叫んでいる。

男A「道東コースの聖火はですねッ、現在国道三十六号線支庁堺引継所。予定はまったく狂っていません——千歳の天候は雪——」

狂騒の案内を移動していくカメラ。

男B「(電話に叫んでいる)道南コース予定通りだねッ。

了解——(電話切って叫ぶ)道南コース、現在小樽市民会館前出発。準備すべて完了——」

壁にかけられた大パネルに、聖火の進行が着々書き込まれる。

電話のベルがけたたましく鳴る。

男C「(とって)式典課!! ちよっと待ってください!

小田君! 河西氏に家から電話!!」

電話中の小田(三十六歳)。

顔上げちよっとうなずく。

小田「そりゃあよくわかってるンですよ!! 僕あもう安心してるンですがね。ただ(声ひそめて)河西さんが

ああいう人でしょう? 気が小さい、ときてますからね、何しろ僕なんかここんとこ毎朝七時に電話で起こされてですね、走れ、走れ、もう一日じゅう——」

五郎、とび込む。

五郎「小田君!! 表!! 浅沼先生!! すぐ行って!」

小田「これ電話!(渡して走り去る)」

五郎「(代わって)河西です!! ああ——!! 探してたんだよ南さん!! いやじつあですネ。風船が何時間もつかってことなんですよけどね——ええ。——ええ。——ええ。——いや。——いやしかし実際に——。ええ。——ええ。——いやだけど万一つてこともあるから、(泣かんばかりに)けど後もう当日まで五日ですからね。ええ。——ええ。——しかしです! ——ええ」

カメラ、ゆっくりと移動して放置されたままの電話の受話器。

綿々と泣きごとを並べ立てている五郎。

河西家・居間

電話で待たされている雪子。

あきらめ、ことりと受話器を置く。

そのまましばらく動かない。

窓の外にチラホラと降っている雪。

轟々と燃えている石油ストーブ。

雪子、ぼんやり歩き、ブレヤーのレコードにピックアップを置く。

廻りだすレコード。由紀さおりの「生きがい」

雪子、

ストーブの前の床に腰を下ろし、ソファの背中に頬をもたせかけて、ぼんやりソファの布地をいじっているふと。

レコードのジャケットをゆっくり手に取る。

ジャケットに書かれている小さな文字。

「第12回結婚記念日にて。」

一九七一・一・三〇」

ぼんやり見えている雪子の顔。

「生きがい」の文字。

流れている「生きがい」

白い画面

画面に文字が——「正午」

ホテル食堂

静かに流れている音楽。

食事している雪子と京子。

京子「じゃあ、開会式の風船があがったらあ、河西さんて思やいのね」

雪子「そう」

食べる二人。

京子、食べつつクスツと笑う。

雪子「（見る）何？」

京子「ううん、ただちよつと——。あの河西さんが、風船風船って、深刻になっているのかって思ったからおかしくて」

雪子。

京子「ごめんなさい。だけど想像するとおかしいわよ相当」間。

雪子「でも彼、かわいそうみたいに一生懸命なのよ」

京子「そりやそうでしょうけど」

食事する二人。

間。

京子「走ってる？」

雪子、顔上げる。

笑いをこらえている京子の顔。

雪子「何が」

京子「彼よ」

雪子。

京子「何かっていうとすぐ走ったじゃない」

短い間。

雪子「そうだったかしら」

京子「そうよ！」

雪子「——」

京子「おぼえていない？　あなたが高沢さんにプロポーズされたって噂のとき——有名だったわよ。彼焦っちゃって北大から豊平橋まで走ったって話、あのふとった体で」

雪子。——思い出し、スプーンを使いつつちよつと笑う。

室内に流れている静かな音楽。

京子「高沢さんに会うことある？」

雪子、驚いたように京子を見る。

首をふる。

京子「小樽にいるんでしょ」

雪子「うん」

京子「まったく交渉なし？　あれからずっと」

雪子「彼ンところには年賀状来るわ」

京子、ニヤツと雪子に笑う。

雪子「何よ」

京子「笑って」熱かったもんな。あの頃あなたたち——
てっきりあなたあつち取ると思った」

雪子「いやね」

京子（クスツと笑う）

雪子「もう十三年前の話よ」

京子「あらよく覚えてる。十三年なんて。細かく」

雪子「（苦笑）ばかね」

京子「——」

雪子、食べつつポツンと、

雪子「明日が結婚記念日なのうち。十三回目の。だから
はつきり覚えてただけ」

京子、驚いたように雪子を見ている。

京子「ホントオ！」

雪子、無言でフォークを動かしている。

室内の音楽。

間。

食べている雪子の顔。

雪子の声「明日何の日か覚えてる？」

記憶（フラッシュ・インサート）

ほんやり雪子を見た今朝の夫。

食堂

食事している雪子の顔。

京子の声「結婚記念日って何かするの？」

雪子、ギクンと京子を見る。

京子「だいたい旦那さんおぼえてる？」

雪子の顔。

——強引に笑う。

雪子「当り前よオ」

京子「そりや偉いな。うちなンか五年目くらいから忘れち

やってたわ」

雪子「（微笑）うちのはそういうところちゃんとしてるの」

京子「まあ、ごちそうさま」

雪子「いいえ」

微笑で食事する雪子の顔。

記憶（フラッシュ・インサート）

今朝の五郎。

食堂

雪子。——黙々と食事する。

京子「いいなあ」

雪子「何が」

京子「こんな——札幌なンかで、記念日覚えてる旦那さま

と」

雪子「何いつてるのよ。あなただっていいじゃない。旦那

さまに旅行につれてきてもらったり」

京子「脅迫したのよ。二年前からの約束なンだもの。札幌

オリンピックに連れて来なかったら絶対私浮気してや

るからって」

雪子「すごいなあ」

京子「浮気しようって思ったことない？　あなた」

雪子「私!？」

京子「うん」

雪子「あなたあるの!？」

京子「あるある」

雪子「——」

京子「あなたないの」

雪子。——ちよつと笑う。